



巻頭言— “正義”に関する目的論

マイケル・サンデルは「美德」を奨励する観点から正義について考えるアプローチとして、古代ギリシャの哲学者アリストテレス(紀元前384-322年)の正義論を取りあげています。アリストテレスは、正義は「目的(テロス)」にかかわるとし、「正義とは人々に自分に値するものを与えること、一人ひとりにふさわしいものを与えることを意味する」としています。たとえば笛を配るとした場合、最もよい笛をもらうのはだれなのかという問いに対して、それは「笛を最もうまく吹く人だ」としています。笛はうまく演奏されるという「目的」のために存在しているのだから、この目的を実現できる人こそが、最もよい笛を持つべきなのです(サンデル、pp.294-297)。

現代思想(ポスト・モダン思想)に大きな影響を与えたとされるニーチェ(Nietzsche, F.W. 1844-1900)は、「神は死んだ」としてキリスト教的宗教観に基づく西欧の思想を批判し、「人生には意味はない」といったニヒリズムをもたらしました。それと対比するとアリストテレスは「人生には目的がある」とし、「人間としての善き生き方」を説いたといえます(小林正弥 2015『アリストテレスの人生相談』講談社)。

サンデルはこうした問題を考えるうえで次のような例を挙げています。テキサス州西部のアンドリュース高校の1年生のコーリー・スマートは、チアリーダーとして活躍し、人気を集めていました。コーリーは脳性麻痺のため車椅子で動きまわっているにもかかわらず、フットボールチームの試合でサイドラインから元気一杯に応援し、選手とファンの熱気をかき立てていたのです。

しかし、シーズンが終わるとコーリーは、チアリーダーのチームから外されてしまいました。コーリーのチアリーディング部への参加を先頭に立って反対していたのは、キャプテンの父親であったのですが、コーリーの安全が憂慮されるというのが彼の言い分でした。でもコーリーの母親は、反対運動が起きたのは娘の人気への反感からではないかと感じていました。学校の理事はそうした突き上げにより、コーリーに「翌年もチームに加わりたいのなら、ほかの部員と同じテストを受け、開脚や宙返りといった難易度の高い体操の規定演技をするように」と求めたのです(サンデル、pp.290-291)。

さて、コーリーがチアリーダーとしての資格が認められるためには、要求通り規定演技ができなければならないのでしょうか？ それとも彼女に対して、この要求を突きつけることは正義に悖る(もとの)不公正なことなのでしょうか？



こうした騒動はチアリーディングの目的に関する混乱のために生じているといえます。その目的が愛校心をかき立て、ファンを活気づけることにあるなら、コーリーは立派にその機能的目的(選手の応援)を果たしていることになるので、彼女をチームから外すことは誤りです。しかし、チアリーディングの目的が演技力や表現力を競いあう競技性にあるのなら、コーリーを認めることはできません。演技力を高める努力や高度な技術を身に付けることは「賞賛」に値します。保護者が主張するような「安全が憂慮される」から入部が求められないのではなく、その演技力を身に付けるために積み重ねている努力にともなう「名誉」にかかわるために、同じ土俵でコーリーが「応援」をすることには抵抗が生じるのです。

人種やジェンダーなど不利な条件を補うためのアファーマティブ・アクション(affirmative action: 積極的格差是正措置)に関する対立も同様の枠組みで捉えることができます。大学入試において特定の人種の人達を入学させるための特別枠を設けている場合、大学の目的が「公民的目的を果たすこと」であるのなら、そうした措置の必要性が認められます。しかし、大学の目的が「学術的な力を伸ばし学問を追究すること」であるのなら、学力以外の要素を入試の際に考慮することは誤りだといえます(サンデル、pp.300-302)。

アリストテレスは、政治の目的は「善き市民を育成し、善き人格を養成することだ」ともしています(サンデル、p.304)。換言すれば、政治の目的は「善き社会」にしていこうということです。そうだとすれば、私たちには、「共通善について熟慮し、実践的判断力を身につけ、自治に参加し、コミュニティ全体の運命に関心をもてるようにすること」が求められるのです(サンデル、pp.305-306)。このように目的論的思考で考えると、正義論をより実践的な観点から捉えることができます。ようになります。

KCD ラボ代表 松端 克文

シリーズ 情勢分析と運営・実践の処方箋

今月のテーマ：行動療法に基づく支援（中）

◆応用行動分析学（ABA）

行動療法は基本的には行動分析学に基づく方法論であるが、今日の療育の現場ではそこからさらに発展してきた応用行動分析学（Applied Behavior Analysis：ABA）が注目されている。ABAでは、「人間の行動の理解とその改善に全力を注ぐ科学」であるされている（前川圭一郎（2023）『応用行動分析学入門：行動と環境の相互作用の視点から』『コミュニケーション障害学』Vol.40、p.129）。ABAには、次のような7つの原則がある。

応用行動分析学(ABA)の7つの原則

- 1.応用的：社会的に重要な問題に関連する行動を扱う
- 2.行動的：標的行動は、客観的に測定できる具体的な行動とする。
- 3.分析的：標的行動が変わるだけでは不十分であり、行動が介入により変化したとうことを明らかにするために計画かされた実験法（シングル・ケースデザイン）を用いる
- 4.技術的：行動変容の手続きは、誰が実施しても再現可能な技術でなければならない
- 5.系統的：行動変容が介入（支援）によって変化し因果関係を示せた場合、基礎研究で明らかとなっている行動の諸法則を用いて検証を行う
- 6.効果的：介入の前後で標的行動の頻度の差に統計的有意差があっても、実践的・社会的に意味のある変化でなければ満足はいく成果とは認めない
- 7.般化促進的：介入により変容した行動が、訓練場面だけではなく、日常生活の様々な場面に般化されるよう介入計画（支援計画）が作成されている

（前川（2023）、p.129より）

自閉スペクトラム症（ASD）やADHDなどの発達障害がある場合、「こだわりが強い」とか、「じっとすることが苦手で落ち着きがない」、「視線が合わずコミュニケーションが取りづらい」、「奇声を発する」、「自傷や他害行為がある」、「器物破損など乱暴な行動が目立つ」、「パニックを起こすことがある」といった問題とされる行動が認められることが多い。

ABAではこうした問題とされる行動（＝標的行動）だけではなく、行動前の出来事と行動後の結果にも注目し、当事者の感情や思考、行動だけではなく、周囲の環境も分析対象とする。そして行動の前後の分析を通して、その行動の目的を明らかにし、その行動の前後の環境を操作して、標的行動を減らしたり（行動の減少＝「弱化」）、望ましい行動を増やすこと（行動の増加＝「強化」）に焦点があてられる。

◆「随伴性」に着目する

随伴性（行動随伴性）とは、「ある行動によりある結果をもたらされる」という関係を意味する心理学用語である。前号で紹介した「三項随伴性」に着目した「先行条件（A）⇒行動（B）⇒結果（C）」という3つの枠組みで行動を捉えるABC分析はその代表例である。こうした行動随伴性と「強化」と「弱化」の関係について整理してみると次のようになる。

行動の増減に関する行動随伴性

	刺激の出現	刺激の消失
行動の増加 （強化）	好子出現の強化 （正の強化） I	嫌子消失の強化 （負の強化） II
行動の減少 （弱化）	嫌子出現の弱化 （正の弱化） III	好子消失の弱化 （負の弱化） IV

I. 好子（強化子）出現の強化（正の強化）

行動の直後に「好子」が出現すること、その行動は将来繰り返される

II. 嫌子消失の強化（負の強化）

行動の直後に「嫌子」が消失すること、その行動は将来繰り返される

III. 嫌子出現の弱化（正の弱化）

行動の直後に「嫌子」が出現すること、その行動は将来しなくなる

IV. 好子消失の弱化（負の弱化）

行動の着後に「好子」が消失すること、その行動は将来しなくなる

「好子（強化子）」とは、行動の直後に出現すると、その行動が将来の生起頻度を上げる刺激や出来事、条件のことであり、逆にその直後に消失するとその行動の将来の生起頻度を下げる刺激や出来事、条件のことという。

「嫌子（罰）」は、行動の直後に出現するとその行動の将来の生起頻度を下げる刺激や出来事、条件のことであり、行動の直後に消失するとその行動の将来の生起頻度を上げる刺激や出来事、条件のことという。

（前川（2023）、p.131より）

いつも冷蔵庫の前で叫びながらジュースをねだる ASD の傾向のある子どもがいますとすると（TOS 家庭教師センター「SST ソーシャルスキルトレーニング / ABA 応用行動分析 / CBT 認知行動療法」<https://tos-kc1.com/kids/sst-aba-cbt/>）、ABA 分析ではたとえば「のどが渇いている」＜要求＞ために「叫ぶ」という行動がもたらされるのだと解釈されると（＝仮説）、それに基づいて療育方法が検討されることになる。この場合では、子ども冷蔵庫の前まで叫ぼうとする直前で、支援者が「のどが渇いたの？」「ジュース飲もうね」と、優しく話しかけ（＝「好子・強化子」）、その後すぐにジュースを渡すようにする。

するとそれまで叫ぶというコミュニケーション方法を取っていた子どもは、叫ばなくてもジュースがもらえるということを学習し（＝「正の強化」）、最終的には子どもが自ら「ジュース」という言葉を発して、ジュースがもらえるようになるというような展開が想定されている。また、もし子どもが話すことができない場合には、言葉の代わりにジェスチャーを教えたり、写真や iPad 専用アプリを使うなどして視覚を通じたコミュニケーション（視覚支援）を学習できるようにすることが重視される。

しかし、叫ぶ原因が「大人の気を引きたい」＜注目＞ということも考えられる。ABA ではそうした場合、かわりをもたないようにする（＝「嫌子・罰」）。こうした支援の妥当性も含め次号で検討する。

KCD ラボ代表 松端 克文
（武庫川女子大学心理・社会福祉学部教授）

毎号ホットなテーマを取り上げ、ヒントを提供します。

シリーズ 障害者支援 超実践！⑦

～〇〇のあり方ってどうなん？～

◆近況報告 学びの秋

朝夕が涼しくなり、ようやく秋を感じられるようになりました。関西万博が閉幕し建造物を今後どのようにするか、という話があがっています。もったいないからなにかに使う、というだけではいけないようです。先々の細かなことまで想定して議論されているんだな、とニュースを見えています。

9月18日～19日に、令和7年度『強度行動障害を伴う発達障害チーム医療研修』（主催：独立行政医機構 肥前精神医療センター）に出席しました。医療、病院の視点から強度行動障害の支援を学び、医療、教育、福祉の連携を促進することが大きな目的であるとの説明がありました。講義を中心に講演、グループワークもありました。普段の支援現場では病院にお勤めの医師や看護師と密に話す機会はほとんどないのでとても新鮮でした。医療と福祉、それぞれの立場の違いはあるけれど、困っている対象者をどうにかしてあげたい、という想いは共通していました。研修のなかで「本当の意味の連携とは、それぞれの領域を超えて手を取り合うこと」というお話があり、改めて顔の見える関係づくりや日常的な情報、意見交換の大切さを認識しました。

10月1日には、仙台で『情報アップデート Day 2025』（主催：独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園）に出席しました。

第1部「広域的支援人材に期待すること」として制度の運用や今後の方向性などのお話がありました。第2部「地域の実践報告」では4つの法人、事業所からの実践報告がありました。第3部「ミニシンポジウムー広域的支援人材の活用方法と可能性ー」では、テーマに沿っていろいろな視点から意見交換などが行われました。最後に第4部では、参加者同士の出会いの時間としてつながる「time（名刺交換）」が設けられていました。1日を通しての感想は「濃い！」が一番です。

兵庫県からは、私を含めて広域的支援人材の4名が参加。加えて兵庫県福祉部障害福祉課の野口主査と、普段コンサルテーションでお世話になっている堀内氏も出席しておられ、馴染みのある顔ぶれに安心しながらも、“チーム兵庫 in 仙台”として濃密な時間を過ごしました。

10月9日には、神戸市知的障害者施設連盟（以下、市知連）の職員研修会として『強度行動障害の状態にある方の支援の基本と実際』が開催されました。堀内氏の講義と兵庫県でSV認定を受けた小倉さん（福成会：尼崎市）、森本さん（五倫会：姫路市）による実践報告がありました。

9月中旬から10月初旬にかけて集中的に研修があり、今後のことについて想いを強くもつと同時に、私自身の支援のあり方を見直すよい機会となりました。それぞれの研修運営等に携わった多くの方々、出逢った皆さまに深くお礼申し上げます。引き続き、一緒に支援を深めることができればと思います。

◆『身近な支援者』④

前述した研修のなかで、身近な支援者という観点で特に印象に残ったフレーズがあるのでご紹介します。

“（強度行動障害の状態にある人の支援、コンサルテーション、SVは）対象者の人生にかかわること”

情報アップデート Day 2025：村上氏（（福）北摂杉の子会 理事長）

ミニシンポジウムでの言葉

“なによりも、ユニークさに敬意を払うことが大事”

市知連職員研修：堀内氏講義資料

“強度行動障害の方の「ゴール」は落ち着いて過ごすことではない。⇒落ち着いて過ごす、安心して過ごすことは当然の権利でありスタート地点”

市知連職員研修：小倉氏発表資料

“「利用者主体、利用者の為に」と考えていた支援も本人が理解した特性に合ったものでなければ、不本意な物になってしまいます。利用者を知る事こそが本人主体の支援の一步であり、そこから利用者が必要とする構造化や配慮などを考えるきっかけとなります”

市知連職員研修：森本氏発表資料

どの言葉も目の前の課題行動だけに焦点を当てず、ご利用者をひとりの人として大切に考えています。皆さんの言葉を受けて、「身近な支援者とは」と考えるとき、まず最初に人として向き合い、かかわる姿勢が大切であるということを強く感じました。

◆超実践！①ご家族の視点 その三

「言われたまんま」

「小学校のときに面白いことがあってね。絵を描く授業のときに先生が、水道から水が出てる様子を描くように言葉で言ったらいいのよ。水を描いて、て。」

そしたら漢字で“水”って書いた。絵を描かそうとしたらしいけど、まちがってないやんね？自閉症は言われたまんま動くから、水を描いてって言われたらそのまま受け取る。絵を描いてほしかったら水の絵を描いて、て言わんとね」

水



見て理解することが圧倒的に得意ですが、言葉でのやり取りをするのであれば、具体的に伝えないと誤解が生まれます。お話の最後に、「こっちが合わさんとね」と笑っておられました。

◆超実践！② 身近なあれこれ、なんでなん？

ご利用者の身近な様子から『なんでなん？どうしたらいい？』を考えてみましょう。久しぶりですね。

☞ 放課後等デイサービスに通うAさん。毎日のように荷物入れの棚の上に上ります。「危ないよ！降りてください！」と言っても降りてもらえません。放っておくと危ないし、ずっと上ったままだし…。

☞ 食事の時間に、ほかのご利用者の食事を食べてしまうBさん。足りないのかな、と思って提供する量を増やしてみたのですが、それでも続きます。まだ足りない？

では、考えてみましょう♪ ヒントはASDの特性、三つ組みの想像することの苦手さ、独特さとコミュニケーションの質の違いです。具体的でないと、見てわかるようになってないと…。答えは次号、大谷さんから。

（サポート統括部 遠山 伸一）

取り組み報告 こんなこと、しています ～よろこび荘 音楽療法士より～

◆障害者支援施設よろこび荘

よろこび荘には現在 60 名（男性 49 名、女性 11 名）のご利用者が入所されています。年齢は 21～70 歳（平均年齢 45.9±13）と幅広く、平均支援区分は 5.9、各フロアでそれぞれ特徴はありますが、96.7%の方が強度行動障害を呈しておられます。

◆音楽療法って？

音楽療法は、「音楽のもつ生理的、心理的、社会的働きを用いて、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用すること」と定義されています。活動における音楽の持つ力と人とのかかわりを用いて、クライアントを多面的に支援していきます。非言語である音楽を用いるため、言語でのかかわりがむずかしいクライアントに対しても有効な方法です。

音楽療法士は、音楽（音、声、楽器、旋律、リズムを含む）を道具として使用し、その人の『いま、このとき』を支えます。行動や視線などちょっとした変化を見逃さず、共有し、かかわりを深めながら、共に歩んでいくプロセスです。

◆よろこび荘での音楽療法

よろこび荘のご利用者は、言葉でのコミュニケーションがむずかしい方がほとんどです。また、人とのかかわりが苦手とされる自閉スペクトラム症の方が大半を占めていますが、人が嫌いなのではなく「その人」が好まない（受け入れられない）かかわり方が苦手なのです。「その人流」のかかわり方、かわられ方をいち早く見つけることが、支援のカギになると思います。音楽療法士は『音楽』という道具を武器に、さまざまな角度からアプローチし、少しでも早く「その人流」を見つけて支援につなぐことで、チームとして利用者さんの QOL（生活の質）の向上を目指しています。



音楽療法スペースは、対象のかたに合わせてカスタマイズします
立て看板「おんがくのへや」は、4 年前に利用者さんと一緒に作成しました

◆アセスメントと目標

2021 年 1 月から開始した集団での音楽療法で見えてきたご利用者の様子をふまえ、2022 年 10 月から個別の音楽療法に移行し、現在 5 名（延べ 16 名）の利用者さんと音楽療法を行っています。

音楽療法も他職種と同様に、計画・実行・評価・再検討を繰り返しながら進めていきますが、既存の評価ツールや指標ではわかり知することはむずかしいのが現状です。

対象となる方の得意な部分やポジティブな特徴を見つけ、

具体的で達成可能な目標を設定し、その人の状況に基づいて効果的な音楽的アプローチを選択して行っています。進行状況を評価し、必要に応じて目標や介入方法を見直します。よろこび荘では、自然にあらわれるポジティブな表現のひとつとして「笑顔」を音楽療法の評価の指標のひとつとしています。

◆オーダーメイドの音楽療法

●A さん／入所前はご自宅で生活されていた方で、もともと音楽は好きな女性です。

人の声や騒がしい環境が苦手で、イライラすると自傷・他害が見られるため、おひとりで居室でゆっくり過ごされることが多いです。



他者とのかかわりのなかでも楽しく過ごせるという経験を積めるよう介入しています。当初は訪室するだけでイライラしたり不安そうな表情をされていましたが、3 年経過したいまでは、音楽療法の写真カードを提示すると笑顔で準備をされるようになっています。



音楽療法の写真カード

●B さん／フロアでの集団の音楽療法でも、音楽への興味が見られていた男性です。日中は床にしゃがみこんだ姿勢で過ごされるため、日常的な内臓圧迫による便秘など健康面への懸念から、椅子座位で過ごしていただく機会のひとつとして介入しました。



介入当初は、音楽療法スペースでも床にしゃがみこまれることが多かったのですが、徐々に椅子に座られる時間が増えました。いろいろな楽器を演奏され、最終はキーボードで音楽療法士との即興演奏でセッションしていました。B さんはとてもすばらしいミュージシャンで、リズムや音量の変化、曲の終止を「阿吽（あうん）の呼吸」で感じ取って演奏されます（現在は休止中）。

●C さん／30 年以上居室から出ることがなかった男性です。音楽療法士が傍に居ることを受け入れてもらえるまで、時間をかけてかかわりました。



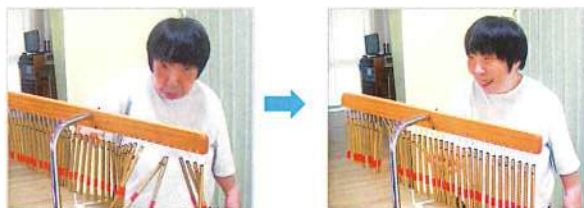
騒がしい環境が苦手で、楽器を「音を出すもの」としては使用していません。2年前の実践報告会以降、写真カードを提示すると「おんがく」と言われるようになりました。また、お名前を呼ぶと笑顔で迎えてくださいます。

●Dさん／感覚鈍麻で、真夏でも上衣を脱いで日なたでの日光浴を好まれる女性です。好きな音楽は1曲のみのため、さらに深い音楽体験を通して日光浴以外の楽しみを持っていただけることを目指しています。



当初は時間を見つけては訪問し、関係性を築いていきました。一緒にフロアを出ることができるようになってからも、音楽療法スペースに行くことができなかったのですが、徐々に定着してきており、いまでは声をかけて歌いかけると音楽療法士をひっぱるようにして移動されます。音楽療法士の手を介して好きな曲のリズムを奏でられるようになっていて、笑顔も増え、声を出して笑う場面も見られています。

●Eさん／徐々に嚥下と手指動作の低下がみられている女性です。もともと音楽が好きで、歌唱のほか楽器への興味を示されます。基本的に何事も「いいよ」と受け入れる方ですが、音楽療法の場面では具体的な希望や選択など積極的です。食べることがお好きなため、これからできるだけ長くご自身のペースで食事を楽しんでいただきたいという思いで介入しています。



真剣な表情からの笑顔



好きな歌は「もみじ」です

ときどき、手指を自傷され傷ができるとバチが握れず、好きな楽器演奏ができなくなるため自傷の抑止につながれたいと考えています。おしゃべりも好きで、女子会のような雰囲気で行っています。

●Fさん／左麻痺があり、コーヒーと阪神タイガースをこよなく愛する男性です。食事場面での手の操作や座位保持にややむずかしさが見られるようになり、また嚥下にも注意が必要になってきています。一日の大半は居室でテレビを見て過ごされています。ご本人が必要だと思わないことに対しては、拒否や受け入れがむずかしい一面があります。プライドが高く、できないことや嫌なことに直面すると激高されることがあります。



【動】から【静】へ

音楽療法では、ドラムとシンバルの演奏【動】と、ツリーチャイムの演奏【静】を行っています。当初は【動】から【静】への気持ちの切り替えができず、楽器を倒すほど力が入っていましたが、いまでは気持ちと力のコントロールができるようになると同時に集中が増し、美しい音色で演奏されています。毎回、音楽的な小さな課題を見つけ、どのように改善していくかを共有するようにしています。次の回には必ず1つは修正されるので、見落とさず、詳細にフィードバックすることでモチベーションを保てるように進めています。短時間で頻回に行うことで日常の一場面になっています。



現在、阪神タイガースのリーグ優勝で、やる気が倍増中です。日本一になる日のために、『六甲おろし』の歌唱と万歳三唱の練習は欠かせません。麻痺側の左手も自然に開きます。支援員からは、怒ることが減ってきたように思う、と聞くようになりました。

◆笑って過ごしていただきたい

私たちは仕事のほかに楽しみを持っています。どちらかと言うと楽しみのほうが大事だったり、楽しみがあるからがんばれるのかもしれませんが、そうなんです。「楽しみを持つ」こと、「楽しみがある」ことは、大きなモチベーションのひとつなのです。それは利用者さんにとっても同じです。

楽しみを持ってほしい
笑ってほしい
いつも笑って過ごしてほしい

このような思いで、日々、音楽療法を行っています。

ご利用者によって受け入れ状況はそれぞれ違いますが、まずはゆっくりとていねいにその人を知ること、その人のペースでかわり、関係性を築くことを心がけています。かわりを持つとしてくる人、近くに(そばに)居てもいい人、ちょっと特別な人…そんな「許可証」を、利用者さんからいただけるようになってようやく音楽療法に進むことができます。そして、利用者さんからいただいたいろんな「許可証」は、私の「勲章」です。

支援のひとつである音楽療法で、よろこび荘の利用者さんの生活に、人生に、「楽しみ」という彩りを添えながら、これからもたくさんの「笑顔」の花を咲かせていきたいと思っています。

(よろこび荘 音楽療法士 竹末 千賀子)

ちょっといいですか？大西ですけど…

－縁（えん）－

◆職員数の考え方

私は、現在採用担当という役割をいただいていることもあって、仕事上多くの方々との出会いがあります。学生さまをはじめ求職活動をされている方、その求職活動を支援する業者の方々、各種学校の採用担当の皆さま等、そのときどきにさまざまな方々と出会います。特に近年は、求人業者の数が（怪しい業者も含めて）飛躍的に増えてきました。

ここ数年、採用活動は厳しくなる一方です。当然ですが毎年退職者があります。単純に考えて、現在の事業を維持していくためには、退職者数と同じ数だけ職員を採用する必要があります。事業の拡大や事業内容の充実等を計画した場合は、通常は、職員実数を増やすため、退職者数よりも採用者数の方が多くなる必要があります。なんらかの理由で、このシステムが崩れた場合、当然ですが現職員一人ひとりの業務量が増えます。ただ、実質の職員数が減少したとしても、職員の支援力をはじめとした現職員の資質が向上している場合は、実質は職員数が増加している状態であるとみなされるのですが、実際に何人いるのかという「実人数」で判断するのが一般的ですので、最終的には、採用活動はこの数字を追いかけることになっていきます。

◆「縁」あって…

当法人のいわゆる新規採用者は、20歳の新卒者から定年後60歳台の方々まで、採用年齢は実に大きな幅があります。また、経歴をみれば、学校卒業後直で入职する方もいれば、まったくの別業界で長年勤めてきて定年後に初めてこの業界に入った方、同じ業界で働いてきたが所属する法人が変わった（転職）という方もいます。年齢、職歴、経験等が違って、ここで働きたい、ここで働いてみようという思いは全員共通ではないでしょうか。

ところで、皆さまは、いつ福祉で働きたいとか、知的障害のある方々を支援したいと思うようになられたのでしょうか。ふとしたきっかけで、些細なことから、この業界、この法人を、この施設を選んだという方も多いかと思います。なかには、まさかこの業界に身をおくことになろうとは思ひもなかった、という方もおられるかもしれません。この採用や就職というプロセスのなかに「縁」という目に見えないものが存在しているような気がします。この「縁」を創り出すのが、採用担当者の大きな役割なのではと思ったりもします。人材不足とは、まさにこの「縁」の数が減ってきている状態です。どうすれば目に見えない「縁」を増やしていくことができるのか、また別の角度から採用活動を考えてみる必要があると思います。（大）

陽気会は「福祉ゾーン」としてのコミュニティの創造を目指します

陽気会は、1958年9月1日に知的障害児施設おかば学園を開所し、2025年の9月から68年目に入りました。

私たちは、これからも私たちの生活の舞台としての“コミュニティ”をより暮らしやすいよう“デザイン”し、

陽気会を拠点とした「福祉ゾーン」の創造を目指して、皆さまと力を合わせて実践していきます。

ラボサポーター(協力会員)募集中です

施設・事業所サポーター 年間 10,000 円

個人サポーター 年間 1,000 円

サポーターの皆さま、いつもありがとうございます

陽気会のホームページ
リニューアルしました

編集委員会：松端 克文
大西 博之・朝日 満子
大島 由香利

〒651-1313

神戸市北区有野中町 2-5-19

社会福祉法人陽気会

KOBE 北・コミュニティデザイン Lab.

Tel : 078(981)7271

Fax : 078(981)0825

HP : <http://youkikai.or.jp/>

Email: kcdlab@youkikai.or.jp

